

# 河上彦齋

一四

## 一名高田源兵衛と鶴崎

立川輝信

### 目次

一、象山を斬つた彦齋……………	一四頁	七、彦齋の処刑)……………	二五頁
二、鶴崎在住中の彦齋……………	一八頁	八、大榎事件と毛利空彥……………	二六頁
三、鶴崎成美館Ⅱ有終館と彦齋……………	一九頁	九、肥後藩と鶴崎……………	二七頁
四、大榎源太郎と彦齋……………	二二頁	一〇、鶴崎「法心寺」所蔵、象山の書……………	二八頁
五、鶴崎有終館の歴史……………	二二頁	十一、むすび……………	二八頁
六、帰熊後の彦齋……………	二四頁	十二、参考文献一覽……………	二九頁

### 一、象山を斬つた彦齋

元治元年六月十一日朝、松代藩士佐久間修理(象山)は山階宮邸に伺候したが、折悪しく参内して不在であつた。依つて執事と約一時間余り会談して同邸を辞し、更に五条下る寺町の松代藩の宿障本覚寺に門人蟻川賢之助を訪うたが、彼もまた不在であつたので、空しく自分の旅舎に帰るべく、三条上ル木屋町通りにさしかかつた際、図らずも刺客肥後藩土河上彦齋、一名高田源兵衛と因州藩士前田伊右衛門に襲われて非業の最後を遂げた。

京都寺町通りのひつそりと人気のない道に黒い影を落として騎馬の武士が通つた。草履取一人、若党一人、馬の口取一人、都合三人を供にしていた。三条通りを突き切つて天応寺の角から対州屋敷の方へ曲つていつた。

黒もじの肩衣に白ちぢみの惟子（かたびら）、萌黄五泉平の馬乗袴、白柄の太刀を佩き、騎射の笠で目を避けていたが、笠の下に〇々（けいけい）と輝く眸は人の心を射すくめるように鋭かつた。

身の丈は五尺七八寸もあり、漆黒の美髯を貯えた色白の男、年は五十四五の風采堂々たる偉丈夫。そして乗馬には西洋鞍を置いていた。

当時の京都は嵐の前の静寂さというか、山雨まさにいたらんとして風桜に満つるというべき時だつた。八・一八政変（尊攘派一掃のクーデター）で、京を退去させられた長州藩士たちが、藩主の勅勘赦免と称し、隊を組んで上京、伏見の長藩邸に滞在し、そこへ諸藩の志士百余人が合流して風雲急を告げる際に、悠々と西洋馬具で、攘夷党連中の鼻先へ開国論をつきつけたので怒を買つたのは当然である。

油蟬の聲が耳にやきつくように暑苦しくきこえる。象山は、何か考へこんでいるように眼を伏せていた。恐らく今天竜寺に屯集している長州藩兵のことであつたらう。

高瀬川を越へて木屋町の通りへ曲つた時、その髪結床から二人の男が飛び出した。ざらりと夏の陽をはじめて白刃が閃いた。

馬の左右から飛びかかつた浪人が、いきなり象山に斬りつけた。象山は、左の股に斬りつけられた。象山は、股へ斬り込まれながら鞭をふつて叩きのめし、そのまま馬を走らせて高瀬川に沿つて角倉屋敷の方へ飛ばしていつた。

その時、物陰から躍り出した男がいきなり馬の前に立ちはだかつたので、馬は棒立ちになり象山は鞍を滑つて地へ転げた。

「えいつ…」

と烈岳の気合と共に、男は腰を低くし右足を曲げ、左足を引いてまるで地をほうような構えで右手を伸ばして横に払つた。

脇腹を斬られた象山はそれでも屈せず刀を抜いて抵抗したが、ふり下された刀が顔を斬り割つた。そして、かけつけた男が肩から斬り下げた。もう象山は氣力を失つてばつたりとのめりこんだ。

若党の坂口義太郎があわててかけつけた時は、刺客は素早く長州屋敷の東北の角にある高瀬川橋の方へ逃げて行つた。

「待てエ……」

と、追いつがつて抜いた刀を力一ぱい投げつけた。逃げる男の一人の足にあたつたらしいが男は振り向きもせず橋を渡つて角倉屋敷の角を曲つて姿を消した。義太郎が引返して象山を抱き起した時にはもう息は絶えていた。(若党義太郎口供書)

その晩、三条橋に次の象山罪状書が掲げられた。

信濃松代藩 佐久間修理

この者、元来西洋学を唱え、交易開港の説を主張し、枢機方へ立入、国是を誤り候大罪、捨て置き難く候処、剩へ奸賊会津・彦根の二藩に与力し、中川宮と事を謀り、恐れ多くも九重御動坐、彦根城に移し奉候御儀を企て昨年頻りに其機会を窺い奉り候大逆無道、天地にいるべからざる国賊につき、即今三条木屋町に於て、天誅を加えおわんぬ、但し、斬首して梟木にかくべきところ、白昼その儀に能わざるものなり。

元治元年七月十一日

皇国忠義士

檢証

真田信濃守家来

佐久間修理

(年令五十四五年位)

一、身の丈け五尺三寸位、顔細長く、眼細く鼻並、齒並一本欠、髮班白、耳並、単羽織及び袴を着け、大小を帯ぶ、落馬の儘相捌れ居り、頭を西の方に向け、足を東北に延し、疵所は左の脇肋骨を刀の突疵一ヶ所深く肺を貫き、而して又背首の付根

より五六寸を下り一刀を下し、死を確むる為め切付たるもの也

右之通り

然るに先生は身長は五尺七寸位あつた。然も耳は尋常でなく扁平で大きく、頭髮は五十越えても漆黒で、一本も白髪は見えなかつたとのことである。従つて右の検証は粗雑であつたものと思はれる。従つてこの検証書きよりも藩の侍医、山田見竜が疵改めの節、写し取り置いた左記文書が信すべきであろう。

一、額に四寸二ヶ所

一、同式寸五分

一、左の手のまた一寸、

一、同脇腹二寸

一、同上の上一寸五分

一、右の手式寸五分

一、右の親ゆび建割一寸、

一、右のすね三寸深さ一寸

一、右の股二寸五分

一、右の腕二箇所一ヶ所二寸余  
深さ一寸五分

一、二の二の腕より肩へそぎ取六寸

一、右の頬目より耳まで

以上の如く都合十三ヶ所の痛手を負うて即死加害者に就ては種々の説があつて判然していない。木屋町茶屋の主婦の目撃談としては、刺客は一人で朱鞘の大小を帯び、年令三十七八才位の浪人者だと云う。しかし一人でないことは従者の口供書、及び三沢の手記等によつて明かである。

己に記したやうに象山は鬚をはやして、西洋馬具を置いた馬に乗つていた。当時こんな風をして京都の市中を横行するものは象山の外にはなかつた。それで世人は象山を異人々と云つていた。刺客は河上彦齋と、松浦虎太郎の二人で、象山が馬に乗つているところを突然足を斬り落馬したところを殺したとのことであることは前に記した通りである。

彦齋が象山を暗殺したのは単に開国論者と云うばかりではなく、遷都を企て討幕の計画を破壊したのが主因であつたと思われる。

長谷川鉄之進の日記によると、長谷川と大楽源太郎が佐久間を殺さうとして久坂玄瑞に相談したところ、お前達は別に用いる所がある、ソナ役目はするな、誰か外の壮士に命ずるから」と云つたとのことである。

## 二、鶴崎在住中の彦齋

その後彦齋は京都、長州などで活躍し或は東北諸藩を遊説した。肥後の藩公は深く彼を顧慮してその姓名を改称する事を命じた。彦齋はその注意を厚く謝し、高田源兵衛と改称し、後ち都合あつて源兵と改めた。高田とはその折高田原に居たからである。かくて急転した天下の情勢は彦齋等同志の活躍に不利となつて遂に京を辞して熊本に帰えることになつた。

彦齋は、こうして郷里肥後に帰つたが藩庁では彼の頑固には処置ないので肥後藩の分封豊後鶴崎の地が時局に應じて参事が土着兵の訓練をしていたのでその隊長に任じ、古莊嘉門・木村政雄・吉海良作・莊野彦七等と共に彼の地に遣して駐屯せしめた。時に鶴崎は熊本藩の分封で凡そ二万石計り、郡代を以てこれを統治させていたが、時勢が一変し、今は参事一。並に属官数名を置いて鎮撫させ、且つ土着の兵士を訓練して一旦緩急の用に備えていた。

この時朝廷は彦齋が癸丑以来その王事に尽瘁した勤王の勲功を想ひ、行政官に登用せんとして、命を藩主に下し東京に徵せられた。その辞令に曰く

其方家来河上彦齋儀当官御用有之御雇被仰付候間出仕可仕候事

明治二年二月

行政官

と。これは当時所謂、諸藩知名の人物を招致した徴士である。これが普通の人であつたならば積年の苦心がやうやく酬いられ、今や此の光栄を辱うしたのであるから、雀躍して朝命を奉じたのであるが、彦齋は然らず、「朝議一変した今日、廟堂の諸公、何にすれぞ真に彦齋を用ひんとする。彼等に籠絡せられて官途につくのは甚だしい屈辱である」として、則ち病と称してこれを辞した。

ついで藩庁天賜の恩金を彼に頒与した。これは彼の親兵としての功勞に酬ひたのである。

河上彦齋事高田源兵衛

其方儀去る亥年御親兵として京都へ被差登置候処、同夏以来、長々滞京、御用出精相勤候ニ付、從朝廷、金子六百疋被下置旨、被仰出候条、可有頂戴候事

明治二年九月十八日

### 三鶴崎成美館 || 有終館と彦齋

一たび鶴崎の人となつた彦齋は、その地が僻陬で武を用ふるの地ではないが、東上するのに船舶の便があるばかりでなく、その風俗人情が厚く、その人が健かで、武を練り、文を講ずるのに適している。我、此地に来て、唯々碌々として從爾して過ぐすことは出来ない。古莊・吉海・木村・莊野等と謀り、また此の地の碩学、毛利空桑等に談じて、先づ練兵より始めて、文学、産業に至るまで、よくこれを整備し、興隆させようとして、己に解放された旧兵員の中から、年少壯丁の徒を選抜し、先づ常備兵の法を設け、これを一營に屯集させ、余暇のある時には文学を講習し、兼ねて操舟の術をも練習させ、かたわら、殖産開拓等に着手し、以て永遠に富強の策を建てんとし、毛利空桑、その屯所を有終館と名づけ、兵士の集まる者数百名、彦齋はこの館中に日夜起臥して兵士と寢食を共にし、苦楽を同じうして、常に尊攘の大義を講じ、天下の形勢を説き、鼓舞作興したのである。

或夜蚊群が猛襲してその声が雷の如く、而も館中蚊帳に乏しく、兵士は青松葉を焚いて蚊を追うた。彦齋は独り蚊帳を吊るし、寝ずに酒を飲み、酔つて横臥し漸く眠についた。万事かくの如くで、兵士が彦齋を慕うことは、慈父の如く敬慕して、その用を為すことを熱望して居た。長州奇兵隊の余党も来り会する者も多かつた。

一日土佐の有志、沢守衛と云う者が来て、毛利弘氏曰く古井小太郎暫く館中に寄宿した。彦齋はその素性が判らないので警

戒して内情を告げなかつたのに、空桑は欺かれて密事を物語つた。その沢が岩倉公の密偵であつたことの知れたのは彼が館を辞し去つたあとであつた。後で事が判明したので、彦斎一派は協議して、中村六藏外壯士二名がこれを追いかけて斬殺し、三氏はそのまま逃亡した。

この件に付て鶴崎住、空桑の孫、毛利弘は事實はこうだと次の如く云つてゐる。

年多くて思慮のある空桑は、古井小太郎が真に勤王の志士であることを知つていたが、年若い血気にはやる彦斎一味はスパイと信じ、お互に見解が相違したので空桑は彼等一同を招き、大に真相を知らすべく討議したが、木村は密偵と主張し他の者も同意、彦斎も黙認してうなづき、その結果遂に樋口を追放し追跡して途中、市内、大道の峠で斬殺したのである。と。

当時鶴崎の参事は、緒方夫門で、彼は勇武で且つ計略に富んでいた。彦斎は京都で相知り時局に対し、共に、新政府の施政に心よからぬ点で、相通ずるところがあつた。

彦斎がある時、熊本に出て、閑誠之の家を訪ね、当時十四五才の彼の頭を撫で

「佳兒、佳兒、汝生れて地獄を見んと欲せば請う我が有終館に来レ」と云つたとは後日閑の語るところである。この際「地獄」とは戦争の状を云つたのである。

彦斎が鶴崎の有終館にある時、彼を重用せんとした三条公が飛書を以て彼を召した。ところが彦斎はその書を裂き、鼻を拭ひ、笑つて曰く「予豈ニ時勢ニ従イ、飄麥シ風中ノ旗ノ如クナル腐儒ノ下ニ立ツヲ欲センヤ」と云つて遂に応じなかつた。と。

空桑と彦斎との交友關係に就ては現に鶴崎の空桑資料会館に所蔵している次の書簡によつてもその一端を知ることが出来る。拜見仕候、嚙々御配慮被成候はん、御蔭ニ而諸事都合何れも難有、仕合ニ奉存候、直江列之儀口未ニ得与承知不仕、古荘も昨夜より木村江申残候事、有之候間、出掛、夕方ニ者罷帰由筈ニ候、いづれ後刻罷出、委細奉伺筈ニ御座候、

先ハ右貴答まで御座候以上

#### 四、大薬源太郎と彦斎

明治二・三年の交、彦斎が鶴崎にある時、明治新政をよるこばない防長の旧隊士等の内に兵を起さんとする者のあることを知つて

「長防の士は元尊王を主唱した国で、彼等の諸隊は実に維新の先駆で勲功の士である。今これを分裂崩潰させてはならぬい。」

と。自ら長州に赴いて調和せんと欲したが、その発せない前に、事既に暴露して諸隊が悉く敗走して、その首魁大薬源太郎以下多くの者が逃れて鶴崎に来て彼の下に技じた。彦斎は往年長州に居た際、彼等長防の士が彼を厚遇して呉れたことを思つて、「彼等も亦神州の正気である。これを救済することは即ち神州の正気を擁護保全する所以である」と。

これを各所に潜匿させ、懇に取扱つた。すると脱走の兵士等は、交々彦斎に迫つて兵を借り、以て回復を図らんと欲した。ところが彼はこれを辞して曰く

「今、茲に、兵数百と糧若干はあるが、是は皆、藩知事たる旧藩公が、此の彦斎に預けられたるもので、これを動かすことは、私を以つて公を害するものである。且つ今日は彦斎が貴国に居た当時とは社会情勢が全くちがつている。諸君幸にこれを諒せよ」

と深く思慮するところがあつて、遂にその請を許さなかつた。

それで脱徒等は議論が一致せず、或は帰国して再挙を図らんと云う者もあり、或は他藩の声援を借らんとする者もあつた。其後分散して諸方に投じ、その中には官兵が追撃して捕縛し、又は斬り殺したのもあつた。



これより先き、久留米の川嶋某、佐藤某等は古松簡次の旨を受けて鶴崎に来、言を尽くして長防回復の事を勸説したけれども、彦齋は大業一味脱徒の爲すあるに足らないことを語つて応じなかつた。惟うに鶴崎の瓦解、彦齋先生等の免職はこれが原因の一つではあるまいか。

彦齋は鶴崎在住中同志を朝鮮に遣はして貨物を輸出し、或は大阪に販商して壯図を挙ぐる資を得、時勢は後日、我が国に禍するものは、魯西亜と思うので、先づ蝦夷を開拓してこれをおさえることが急務だとして、夙に同志と謀り、先づ商領を彼地に設け、物産を送る通商の手段に及んだのに、藩政が一変して、彦齋一味は悉く其職を免ぜられて事は瓦解した。

彦齋が古荘、木村、吉海、荘野等と共に、満腔の遺憾を抱きながら、一と先づ有終館を閉ぢ、遠近より来り集つた兵士を慰諭して四方に解放し、明治三年秋七月、悠々鶴崎を辞して、熊本に歸つた。毛利空桑以下、多数の同志は涙を呑んで之を送つたのである。

熊本に歸つた彦齋は、一日重もな同志と会合して鶴崎の事情を報告し、天下の形勢を説き、人心の向う所を定めるには、新聞を創刊するにしくはない。況や同志を結合して輿論を喚起するにはこれにまさるものはないと唱へたが、一人もこれに賛成するものがなく、そのままとなつたのは実に惜しい事であつた。彦齋にせよ、空桑にせよ、共に所謂熊本の反骨精神旺盛で、一面より見れば時代の推移を解せぬ頑強者であつたが、また一面には、進歩した思想家でもあつた。

## 五、鶴崎有終館の歴史

熊本時習館内に再春館の建設を見たのは宝曆七年で、その年の八月に文武稽古所を開き、鶴崎に成美館が設けられて学問と武芸を奨励した。

A 鶴崎成美館の發生順序を畧記すると。

1 その所在は旧鶴崎町百六十六番地

現大分市大字鶴崎……………

2 最初は文武の芸は皆師家に通学するのみ

3 第八世細川重賢の代、旧鶴崎お茶屋内の一所を画して稽古所とした。

4 寛政十年、第十世細川斎茲が速見郡豊岡出身の儒者脇儀一郎（蘭室）を本藩に聘して訓導した。

5 翌年蘭室を鶴崎に移住させて文学教導を委任、その為め来学の子弟が増加した。

6 文武兼修となる。

7 天保六年六月、毛利到（空桑）に稽古所開講下命。同十一年十二月廿一日鶴崎御家人の学問教導方に任じた。

8 第十三世、細川慶順が文久元年冬に鶴崎会所の余金でお茶屋の構内に一舎を新築して成美館と命名した。そして従来の稽古所が専ら文学を主としたのを改めて文武両面の道場とした。

9 空桑、嘉永二年十月十四日、病氣の故で辞した。

10 米艦の渡来で、空桑は尊王攘夷の論を主張して四方の志士と呼応し、藩は萬延元年高田源兵衛と議し、藩の東鎮として文武兼修の有終館を設置し、秀才青年を寄宿させて文武を鍊磨し、大に志気を養った。

B 彦齋と有終館

己に記した如く、たまたま熊本藩から鶴崎に鎮撫の兵隊を置くこととなつて、河上彦齋、高田源兵衛がその隊長となつて、古荘嘉門、本村弦雄、吉海良作、莊野彦七等と鶴崎に駐屯し、土着の兵士数百人を集めて熱心にその訓練を施すと共に一方土地の碩学毛利空桑と相謀つたて「有終館」と名づけ、海陸の戦術、殖産興業の振興に至るまで、自ら身を以てそれ等の青年を教育し、国家萬一の際に備えた。

然るに不幸にして長州での当時の反政府党であつた大楽源太郎一派の飛沫を浴び、明治二年七月、遂に有終館を閉鎖して鶴崎を去つて帰熊した。

## 六、帰熊後の彦齋

明治三年七月、彦齋は鶴崎を去つて熊本に帰つてみると、藩の政状は全く一変して政権は反対党即ち実学党の米田虎雄、津田信道、安場保和、山田武甫、嘉悦氏房、太田黒惟信等の手に握ぎられて、従来藩政をとつていた学校党は皆斥けられて手も足も出ない実状であつた。

当時我が国内では新政に服せない者が諸藩に点在していた。既に東北には雲井竜雄、初岡敬二、曳田源二があり、京都には外山愛宕、土佐には岡崎弦介があり、長州には大楽源太郎、富永有隣等があり、別派として前原一誠、奥平謙介、横山俊彦、小倉には夏吉利雄、秋月には宮崎車之助、今村百八郎、久留米には水野慶雲、古松簡二、川嶋隆之助、横枕角助があり、この外薩藩の士族横山正太郎は時事を憤慨して建白して公議所玄関で自刃した。

こうした社会状勢の下、彦齋も日々に時事の非となるのを憂えて、大に覚悟する所があり、各地の同志と相通じて、事を挙んと劃策し、当の長崎県令は、土佐の有志で、曾つて彦齋と同じく七郷と共に長崎に落ち、共に天事に尽し、維新後、鶴崎で会見し、相誓つたこともあるので、一書を門人松山守善・高津運記等に托送することになつた。それで彼等二人はその年の九月末その書を携え、彦齋の使節として島原に渡り、それからは徒歩で長崎に着し、翌朝石田を訪い、書翰を手交して来意を告げた。石田はその書簡を熟読し、且つ彦齋の近状を尋ねたので、有昧に、有司の嫌疑を受けて、今やまさに、禍のその身に及ばさんとすることを告げた。石田は何か感じたような態度で、それは気の毒であると云い、そして最早や朝議は開国に確定し、薩長土の藩論もそのように一致しているの、今日では以前の精神と主張は改めざるを得ない。別に返翰する必要もないので宣しく伝言して呉れとのことであつた。二人は遺憾ながら恨をのんで急ぎ、帰途につき、午後十時頃馬借町の彦齋宅に着し、石田の伝言を復命した。彦齋はすでにかくあるべきとを予期していたと見えて、直ちに酒を温めて二人の使者を侑めた。

勇敢智略に富んだ彦齋も、事志と違い一日同志の富永萬喜、石原運四郎等に対し、

「僕も今度縛されたら最後である。君等さえやるなら何時でもやろう」

と語氣するぞく、而も心氣一転酒々落々として告げた。そこで彼を中心とする同志の面々はこのままに止むべきではない、一挙に兵を起して先づ熊本城を陥れ、速かに藩の同志と糾合して回天の大業を立てようと、一夜藤崎宮を始め、各所に集合した。然るに義華は都合により延期することになり、他の疑を受くることのないよう注意することになつて退散した。

その時に當つて彦齋に対する政府、藩庁の監視は日々に加わつて来て、身辺に危険に迫つた。そこで、古莊・木村等は彼が薩摩の西郷にその身を托することをすすめたが、応じなかつた。西郷方もまた彼を心よく迎えようとしなかつた。

## 七、彦齋の処刑

果せるかな、明治三年十月下旬鉄槌は彦齋の頭上に落下した。即ち

其元儀御様子有之、他藩諸人と面会は勿論假令ひ同藩人なりとも、骨肉の親ならでは面会、交通不相成事と云うのである。

彦齋は既に決心の臍を堅め、その頃移転した谷尾崎の富居に閑居して悠々天命に安んじて居た。すると翌十一月第二の鉄槌は落下し、愈々捕獲されて監獄の人となり、加屋栄太、木村弦雄、鬼丸競、吉海良作、莊野彦七、福岡政右衛門、富永萬喜等も亦同じく藩獄に繋がれた。鶴崎の毛利空桑もこの時同じく藩獄に投ぜられた。

時に判官の糺弾推問は頗る急であつたが、彦齋は少しも弾るところなく、泰然として、長防の脱徒が鶴崎に來り投じた事から、久留米の古松簡次等が企てに賛同を求めて來た事情を事理明白に陳述した。

然し判官は彦齋の言を信じないで、別に異図あるものとして、歳を越えても容易に判決を下さなかつた。時に朝命があつた。

御不審の筋有之高田源兵衛を東京に檻送すべし。

と。或はこれは藩庁からの内奏によつたものではないかとも思はれる。藩庁は直ちに警吏に命じて東京に護送した。東京に着いた彦斎は同じ嫌疑の連中と共に直に小伝馬町の獄に投ぜられた。這般の事情を知る者はないが、その後、法廷に呼び出された彼は、島木判事から次の宣告を受けた。

「其方儀、不憚朝憲、不容易陰謀相企候始末不屈至極に付、庶人に下し斬罪申付、

と。あゝ何とこの宣告は簡單で残酷なことではないか。説には当時東京で暗殺された広沢参議事件に関係ある嫌疑によるとも云はれている。彦斎の刑死したのは陰謀を企てたのではなく、三条公始め廟堂の諸公が変節したのに、彦斎独り同調せなかつた為ではあるまいか。時に明治四年十二月三日で、刑の執行されたのは翌四日で彼正に三十八歳であつた。

かつて熊本県菊地郡長であつた久留米の志士、川島澄之助は、其の著「明治四年久留米藩難記の中に

「又高田は何の罪で殺されたかと言へば、殺すだけの罪は一もなかつたと云う事である。それで軽く処せらるることになつていたが、熊本藩は党争の烈しい所柄で、御一新になつて後、間もなく勤王党は退けられ、反対党たる実学党と云う連中が、藩政の衝に当り、高田等勤王党を恐るること甚だしく、蛇蝎の如く嫌い、どこまでも押し籠め様とするには高田が居ては安眠することができぬと云う事で百方手を尽して朝廷に取入り、漸くにして殺したと云うことである。」と書いてある。

また河上彦斎建碑事務所発行の「河上彦斎」の序文の一節に同国徳富猪一郎氏は

「河上彦斎先生ハ吾カ東肥ノ産出シタ俊傑ノ一人也、先生結髪志ヲ立テ、尊王攘夷ノ事ニ従フ。先生辭氣溫柔、而シテ渾身皆膽、能ク人ノ敢テ為ス克ハザル所ヲ為シ、挺身勇往、自ラ顧ミズ、維新回天ノ偉業漸ク成ルニ際シ、其志ヲ守リテ世ト忤ヒ、時ト背キ、遂ニ其躬ヲ亡ブニ到ル。豈ニ悲シカラズヤ、先生ノ如キハ、独立独行、世ヲ挙リテ之ヲ非トシテ力行顧ミザル者耶否耶、云々」と書いてある。

## 八、大楽事件と毛利空桑

この大衆事件の際毛利空桑等も彦齋と相通じ、長藩士数名を潜匿した廉によつて藩庁から、他藩人応援並びに交通、及び門人教道を差留められ、且つ詮議の次第があるとして、番宅長屋の仮獄に繋かれ、父子四人三月熊本に護送されて、數回取調べを受けた後翌五年十月、家禄と刀を取上げられ、除族の上、罰金九両に処せられた。時に空桑は年七十六、爾來家塾を閉ぢて教授を廢した。而も屏居しながらなお文武を修め、未だ嘗て逸居をせず、時に兒孫を對手に劍術を試み、或は馬に騎り、或は踏水して体を練つて意気を養うことに汲々とした。それで、壯者をしのぐ心身を保つことが出来た。彼が没したのは明治十七年（一八八四）九月廿二日享年八十九才であつた。朝廷は勤王の功を賞して、特旨を以て従六位に叙せられた。

## 九、肥後藩と鶴崎

肥後の國は西は海であるが東は山である。それで參勤交代などで京・大坂・江戸に行くのに甚だ不便である。それで肥後を領した加藤清正は慶長七年の頃、天草全郡二万余と豊後三郡直入・大分・海部の中の一萬三千石との交換を幕府に乞ひ、許されて爾來三百年間肥後領として明治に至つた。

清正は慶長六年熊本築城と同時に沿道の民に命じて熊本より、大津、阿蘇を経て久住・鶴崎まで、江戸參勤往還道を切り開き、熊本から方里が谷まで道の兩側に樹を植えた。當時國人は戦国乱殺の氣が尚しまつていないので、折角植えた杉を根からこぎ棄て、その被害が止まない。大に怒つた清正は次の制札を立てた。

「一枝を切らば一指を斬るべし、一株を伐らば一首を滅るべし」

これでその被害が止み天を摩する大木となつた。世に大津から二重峠の間を清正公道と称して近年迄杉並木がその面影を止めていた。

肥後藩が軍港鶴崎を、清正以降一度も軍港として使用したことはなかつたが、幕末の長州征伐の際には兵船を此処からも出した。

第二回の長州征伐には幕臣長坂血槍九郎が軍監として来港し、肥後兵を督して鶴崎港から出征した。この時肥後藩は佐賀関浦辺の漁船漁夫をも徴発して豊前小倉に廻航した。近代一時は市として発展した鶴崎も現時点では大大分市の工業地帯として将来を属目されている。

## 一〇 法心寺と所蔵の象山書幅

慶長六年（一六〇一）清正はその臣加藤平左衛門（浄春）に命じて、鶴崎に日連宗の雲鶴山法心寺を建立して熊本本妙心寺の常林院日榮上人を開基とした。その後鶴崎も領主は肥後本国と同じく細川氏となつたが、法心寺は引続き肥後藩の庇護を受け明治を経て今日に至つてゐる。前に記した如く左久間象山を暗殺した高田源兵衛事川上彦斎は肥後藩士でその後鶴崎に居た。その彦斎に殺された象山の書が幅物として今日法心寺に所蔵されていることは皮肉と云はざるを得ない。

## 一一 毛利弘氏提供資料

### 有終館

萬延・元久・慶応に亘り、尊王佐幕論四方に沸騰し、紛々囂たり。独り、先生は其の間に有りて、年来の主張し来たれる、尊王の大義を説く事、尤も剴到、遠近の志士、高義を仰ぎ来り、順逆利害を質す者、且夕多忙を極む。遂に先生をして子弟の教育のみに従事するを許さざる有様となつた。明治元年御年七十二歳、高田源兵衛等と相議し、藩に建言して曰く。鶴崎は東鎮の陸方、并に船手御家人若干。其れに高田・野津原・佐賀関・三手永御家人若干あり。之れを用ひて兵備を嚴にせざるべからず。之れ喫緊の急務なりと、藩之れを採用した。秀俊の年少壯丁を常備兵の法を設け、之れを一營に屯集させ、余暇有る時には文学を講習し、操舟の術をも練習させ、旁、殖産をも習得させた。空桑先生此の屯所を有終館と名づけた。其の数、千余人、日夜文武の業を勤む。士氣大いに奮ふ。日出藩・府内藩・三佐・千歳・岡藩等の如き来り教を乞ふ。其の兵式練練場を觀

光場と呼んだ。番代は兵政を統べ、之れを総裁し、先生之が取締役となつた。訓練には唱方役として、高田源兵・古莊嘉門・吉海良策・木村弦雄・草野彦七・毛利莫等が当り、日夜、館中に隊員と共に起臥し、寢食を共にし、苦楽を同しくして訓練に励んだのである。訓練は初め蘭式を用ひ、後英式に改めた。明治二年正月、鶴崎郡代副士を仰付けられた。當時の時勢、何時異変を生ずるも凶り難く、依りて当路者深く議する処有りて、空桑を急に、特に大いに用ひ、副士と為したるなり。又同年十二月左の通り被仰付ける。

毛利 到

其元儀成美館訓導当分被付之畢て御番代之參謀をも致し候様仰付以上 十二月  
明治三年二月二十九日辭職を呈出せるも保留され漸く同年七月二十三日辭職を認められた。

## 一、む す び

本稿は昭和四十年、鶴崎地区文化財研究会並に中央公民館主催の一般地区民に郷土を知らず集いの折講師として筆者が招かれた際講演した原稿の一部の項目に筆を加えたものである。当時彦齋に關連を持つた人は鶴崎を中心に県下各地に志士として散在していた。筆者が一昨年大分合同新聞の依頼を受けて佐伯市の毛利旧藩主蔵の文書を調査した時にも、その中にもあつた。幸に空桑關係は、兒孫毛利弘氏經營の資料館に多くの史料が保存されているので、散逸のおそれがないが、其他は今にして調査保存を講じないと、日と共にその影を失いつつあることは、郷土史の上からも、地方史のためにも惜しむべきことだと思ふ。

本稿は次に記す参考文献から、その殆んどが得られたものである。ここに筆を擱くにあたつて、各著者の学恩を感謝すると共に、無断史料借用の失礼を厚くお詫びする次第である。尚この杜撰な拙稿が機縁となつて大分各位の御叱血により是正されるのを願つて止まない。(本会常任委員)



